

幼稚園・保育所における「気になる」子どもの実態調査(第3報)

— 「気になる」子どもの不器用さに関する分析による検討 —

Surveillance Study on Children with Special Needs in Nursery Schools (III)

水野友有*・平野華織*・別府悦子*
Yuu MIZUNO, Kaori HIRANO, Etsuko BEPPU

本研究では、幼稚園や保育所での「気になる」子どもの姿やその対応の実態を明らかにするため、岐阜県下の幼稚園・保育所のクラス担任を対象とし、郵送による質問紙調査を行った。「気になる」子どもの在籍の有無、保育場面における「気になる」子どもの姿(175項目)の有無について回答を求め、特に「気になる」子どもの不器用さに関連する行動17項目を抽出し、保育者が捉える「気になる」子どもの不器用さの特徴や園種別の違いについて検討した。その結果、クラス担当保育者が「気になる」子ども全3012名のうち2690名(89.3%)が不器用さに関連する行動17項目のいずれか1つ以上に当てはまることがわかった。また、不器用さに関わる行動17項目を保育場面ごとに、①基本的生活習慣の領域、②作業の領域、③運動の領域の3領域に分類すると、どの領域においても手の動作に関わる不器用さと、集団の中で他の子どもたちとの比較から顕在化する不器用さの特徴が明らかとなった。こうした結果から、保育者は保育場面における不器用さに関連する行動を「気になる」子どもの特徴として捉えており、保育場面における子ども不器用さが保育者の「気になる」要因の一つとなっていることを示唆された。手の動作に関わる不器用さは、「気になる」子どもが課題に取り組む時間を延長させる可能性が高く、「気になる」子どもが集中力を持続できない状況になると推測できる。集団の中で顕在化する不器用さは、集団活動からの遅れや逸脱だけにとどまらず、課題への意欲の低下や自己肯定感の低下につながると考えられる。こうした「気になる」子どもの実態から、保育場面における「気になる」子どもの対応において、課題に対する期待水準や自己肯定感を高めるための支援のあり方を検討すると同時に、二次的な問題が生じないような予防的支援の充実が望まれるといえる。

キーワード：「気になる」子ども、発達障害、不器用さ、幼稚園、保育所

1. 目的

近年、保育の現場において「気になる」子どもをめぐる課題が取り上げられるようになり、様々な研究がおこなわれてきた(本郷ら, 2006; 日高ら, 2008)。「気になる」子どもの定義は明確ではないが、何らかの障害があるとの医学的診断がない、年齢にふさわしい子ども像から逸脱した部分がある、保育を進めるうえで気になる点がある、特別な配慮を必要とする、といった状態像だと理解されている(佐藤ら, 2006)。また、本郷ら(2006)は、顕著な知的な遅れがなく専門機関では何らかの障害があるとは認定されていないが、「落ち着きがない」「他児とのトラブルが多い」などの行動特性をもつ、保育者にとって保育が難しいと考えられている子どもであると述べている。また、無藤ら(2005)はLD・ADHD・高機能自閉症などのいわゆる軽度の発達障害や軽度の知的障害の特徴をもっているが、当面診断が不明であったりする子どもを「気になる子」としている。

久保山ら(2009)や大神(2011)の研究では、気になる子どもの特徴として以下の3つを挙げている。①言語の遅れや理解力のなさ、こだわりなどの特異な行動を示す発

達上の問題を抱えた子ども、②音声言語の問題や視線が合わないなどのコミュニケーション上の問題を抱えた子ども、③集中力にかけているなどの落ち着きがない子どもである。池田ら(2007)の保育士を対象にした「気になる子ども」の特徴に関する調査によると、「話を聞けない」「多動で落ち着きがない」「きれいやすい」「未熟な生活習慣」「集団活動が苦手」「感情が不安定」などを「気になる子」の特徴として挙げており、それらは軽度の発達障害の子どもの特徴と類似していると述べている。

このような特徴をもつ子どものかかわりが保育者の「気になる」要因や保育の困難感につながっていると考えられる。特に、保育者は集団活動の中での逸脱した子どもの行動に保育の困難性を感じていることが先行研究から明らかになっている(池田ら, 2007)。「気になる」子どもの集団活動のしにくさは、社会性の乏しさ、動きの多さ、集中力の乏しさなどが関係していると考えられるが、その他の特徴として「気になる」子どもの身体的不器用さが指摘されてきた。村井ら(2001)は、「気になる」子どものぎこちない動作といった不器用さに着目している。視線や表情、ことば、身辺自立、行動パターン、対人関係など、保育者の気になる印象を整理し、その特

*子ども学部子ども学科

徴のひとつに、「片足跳びができない」「ハサミや箸が上手に使えない」「靴の紐が結べない」などの日常生活での動作の問題、不器用さを含めて検討している。また、渋谷(2008・2010)は、子どもの不器用さについての保育者の印象と、標準化された検査の結果との関連を詳細に分析している。その結果、保育者の印象に影響を与える子どもの動作を検討し、子どもの不器用さについての保育者の印象は妥当性を備えていること、子どもの年齢には直接影響を受けないこと、不器用さの程度によって目のつけどころが変化することを明らかにしている。

そこで本研究では、「気になる」子どもの不器用さに着目した。別府ら(2010)、平野ら(2011)が、「気になる」子どもの実態を明らかにすることを目的として岐阜県下におけるすべての幼稚園・保育所を対象に実施した調査で得られた資料について「気になる」子どもの不器用さに焦点を当て分析をおこなった。岐阜県下の幼稚園と保育所(園)における保育者が「気になる」子どもの行動をどのように捉えているか、特に「気になる」子どもの不器用さに関連する行動に着目し、保育場面における不器用さに関連する行動を分類し、園種別での違い、「気になる」子どもの実態を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

- (1) 調査対象：岐阜県下の全ての幼稚園、保育所（633ヶ所）において、各クラス（年少・年中・年長）を担当している保育者を対象とした。
- (2) 調査期間：2010年1～2月とした
- (3) 調査方法：岐阜県下全ての幼稚園と保育所を対象に、郵送で質問紙による調査を実施した。調査用紙には園長および主任を対象にしたものと、クラス担任用がある。
- (4) 調査内容：調査項目は表1のとおりである。本稿では「IV. 気になる子の姿について」を分析した。この項目は、「気になる」子どもの行動特徴を先行研究である本郷ら（2004）の調査で用いられたものを基に、保育現場での経験が深い研究者の意見を加えて作成されたものである。全175項目で構成されており、気になる子どもそれぞれについて、項目に挙げた「気になる」子どもの行動についてその有無の回答を求めた。
- (5) 倫理的配慮：本調査の実施にあたっての倫理的配慮として、本調査は原則無記名とし、調査対象者の個人情報保護、そして研究結果の目的外使用の禁止を誓約する旨を調査票に記載した。

- (6) 留意点：「気になる」子どものうち、障がい児、発達支援対象児として認定されている子どもは除くことを明記した。

表1 調査項目

I. 園種別や規模について
①園種
②在籍園児数
③全クラス数
④全職員数
II. 担当クラスについて
①担当児の年齢
②児童数
③全クラス数
④全職員数
III. 回答者について
①保育経験年数
②性別
IV. 気になる子の姿について
①基本的属性
②生活面・行動面・感情面
・保育者との関係で見られる行動
・他児との関係でみられる様子
・集団場面でみられる様子
③親子関係・家庭環境など
④先生の困り度
V. クラスでとっている対応
VI. 「気になる」子どもの保育で困っていること
VII. 「気になる」子どもの保護者支援で困っていること
VIII. 日頃気になる保護者の姿
IX. 業務多忙の理由
X. 保育全般について日頃感じること

3. 結果

(1) 回収状況と「気になる」子どもの在籍数

回収状況は表2の通りである。岐阜県下全ての幼稚園・保育所638ヶ所を調査対象としたところ、368ヶ所（回収率58.1%）から回答があり、1267名の幼稚園教諭及び保育士から回答があった。なお、調査用紙はなるべく多くの保育者に配布するよう依頼をしたため、調査用紙配布数は正確に把握できていない。したがって保育者についての回収率は求められなかった。回答者1267名のうち性別は、男性33名（2.6%）、女性1208名（95.3%）、不明26名（2.1%）だった。また、保育経験年数では、5年未満が379名（30.0%）、5年以上10年未満が319名（25.2%）、10年以上20年未満が309名（24.4%）、20年以上が215名（20.0%）、不明が45名（3.6%）だった。また、「気になる」子どもの在籍状況は、平野ら（2011）で報告しており、クラスを担当している保育者の88.3%が「気になる」子どもの対応に関わっていた。「気になる」子どもの総人数は3012名で、そのうち「男児」が2217人（73.6%）、「女児」が795人（26.4%）だった。

表2 園種別ごとの回収率・回収人数

園の種類	回収園数	回収率(%)	回収人数
公立幼稚園	42	51.2	92
私立幼稚園	52	49.1	345
公立保育所	163	60.4	504
複合施設	14		50
民間保育所	97	63.9	238
不明			38
計	368	58.1	1267

(2) 「気になる」子どもの不器用さに関連する行動(図1)

「気になる」子どもの姿について質問した175項目について、クラス担当保育者が「気になる」子どもの姿に当てはまるか否かの回答を求めた。175項目のうち子どもの不器用さに関連する行動の項目は17項目だった。「気になる」子ども3012名のうち2690名(89.3%)が17項目のいずれか1つ以上に当てはまるという回答だった。「作品を作るのに時間がかかる(26.1%)」「着替えなどに時間がかかる(25.6%)」「リズムうちが苦手である(24.4%)」「ボールつきがうまくできない(23.3%)」「雑巾やおしぼりをうまく絞れない(21.5%)」「はさみをうまく使えない(20.6%)」では、「気になる」子どもの。その他に「洋服の前後を間違えて着る(17.5%)」「スキップができない(14.7%)」「からだの動きがスムーズでない(14.6%)」「お菓子の袋を破れない(12.5%)」「連続ジャンプができない(8.6%)」「会談を一步一步交差のパターンで降りられない(7.7%)」「コップの水などをよくこぼす

(7.1%)」「まっすぐに走れない(6.4%)」「指先で小さなものをつまめない(5.9%)」「閉じた丸が描けない(5.3%)」という行動が挙げられた。

(3) 保育場面における不器用さに関連する行動の分類(表3)

不器用さに関連する行動の項目を保育場面ごとに、①基本的な生活習慣に関わる不器用さ(基本的な生活習慣の領域:5項目)、②製作など作業に関わる不器用さ(作業の領域:4項目)、③運動に関わる不器用さ(運動の領域:8項目)の3領域に分類した(表3)。基本的な生活習慣領域では、「着替えなどに時間がかかる」、作業の領域では「作品を作るのに時間がかかる」、運動に関わる不器用さでは「リズムうちが苦手である」が高い割合を占めた。

(4) 園種別の違いにおける「気になる」子どもの不器用さ

クラス担当保育者が「気になる」子どもに当てはまると回答した不器用さに関連する行動について園の種別でみると、基本的な生活習慣の領域では、いずれの園種別においても5項目のうち「着替えなどに時間がかかる」「コップの水などをよくこぼす」の順に高い割合を示した(図2)。幼稚園と保育所で比較すると、「着替えなどに時間がかかる」は幼稚園が27.3%、保育所が23.7%で、わずかながら幼稚園における割合が高く、一方「コップの水などをよくこぼす」は、幼稚園が18.1%、保育所が23.1%であり、保育所における割合が高かった。作業の

表3 「気になる」子どもの不器用に関連する行動の3領域

領域	項目	回答数(%)
①基本的な生活習慣の領域 衣・食・住の基本的な生活習慣関わる行動	着替えなどに時間がかかる	769(25.6)
	洋服の前後を間違えて着る	526(17.5)
	雑巾やおしぼりをうまく絞れない	647(21.5)
	コップの水などをよくこぼす	230(7.6)
	お菓子の袋を破れない	376(12.5)
②作業の領域 保育場面における製作の中でみられる行動	作品を作るのに時間がかかる	786(26.1)
	閉じた丸が描けない	158(5.3)
	はさみをうまく使えない	620(20.6)
	指先で小さなものをつまめない	178(5.9)
③運動の領域 日常生活での体の動きや体を使った遊びの中でみられる行動	ぎこちない走り方をする	285(9.5)
	階段を一步一步交差のパターンで下りられない	231(7.7)
	まっすぐに走れない	193(6.4)
	からだの動きがスムーズでない	439(14.6)
	ボールつきがうまくできない	701(23.3)
	連続ジャンプができない	258(8.6)
	スキップができない(4歳以上)	442(14.7)
リズムうちが苦手である	735(24.2)	

領域では、いずれの園種別においても4項目のうち「作品を作る時間がかかる」「はさみをうまく使えない」の順に割合が高く、幼稚園と保育所の比較ではほとんど差はないが、「作品を作るのに時間がかかる」では幼稚園(27.4%)が、「はさみをうまく使えない」では保育所(22.1%)が高い割合を示した。運動の領域については、8項目のうち「ボールのつきがうまくできない」「リズムうちが苦手である」が高い割合を示した。そのうち幼稚園のみ8項目のうち「リズムうちが苦手である(20.9%)」で一番高い割合を示した。幼稚園と保育所との比較では、「階段を一步一步交差のパターンで降りられない」以外はすべて保育所の方が高い割合を示した。

4. 考察

(1)「気になる」子どもの不器用さ

Henderson & Hall (1982) や渋谷 (2010) の研究から、保育者や教師が子どもの動作について抱く印象は一定の精度を備えており、その妥当性が示唆されている。本調査では、岐阜県下における幼稚園・保育所(園)における「気になる」子どもの行動、特に不器用さに関連する行動について、保育者がどのような不器用さを「気になる」子どもの特徴として捉えているかを明らかにすることを目的とした。検討資料は、クラス担当教員を対象とした質問項目と自由記述式回答の質問紙調査から収

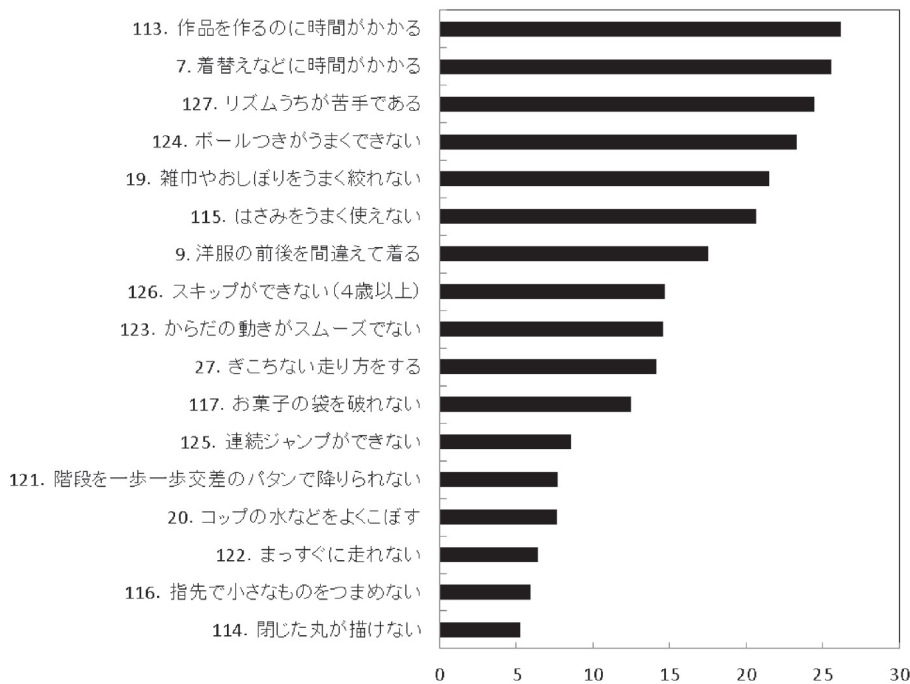


図1 「気になる」子どもの不器用さに関連する行動

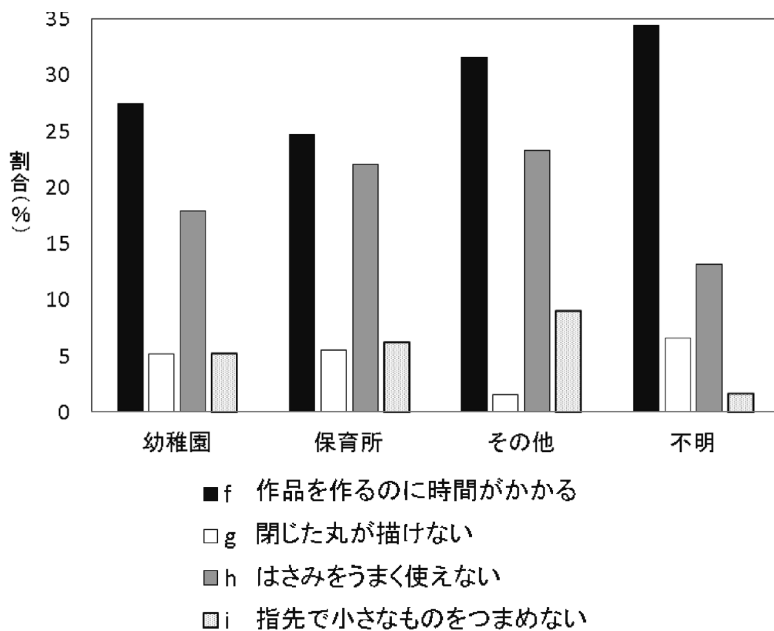


図2 作業領域の不器用さに関連する行動の割合(園種別)

集した。1267名の回答者のうち、自分のクラスに「気になる」子どもが「いる」と回答したのは1119名(88.3%)であり、約9割のクラス担当保育者が「気になる」子どもの保育に関わっていることが明らかになった。回答者のクラスに在籍する「気になる」子どもの総数は3012名だった。この「気になる」子ども3012名の保育場面における行動、特に不器用さに関連する行動に着目すると、不器用さに関わる17項目が抽出できた。その中でも「作品を作るのに時間がかかる」「着替えなどに時間がかかる」「リズムうちが苦手である」「ボールつきがうまくできない」「雑巾やおしぼりをうまく絞れない」「はさみをうまく使えない」は約2割(20.6~26.1%)、「洋服の前後を間違えて着る」「スキップができない」「からだの動きがスムーズでない」「ぎこちない走り方をする」「お菓子の袋を破れない」は約1割(12.5~17.5%)の子どもに当てはまるという回答だった。また、こうした「気になる」子どもの不器用さは、保育場面における基本的な生活習慣に関わる不器用さ、製作に関わる不器用さ、運動に関わる不器用さの3領域に分類することができた。園種別の比較では、基本的な生活習慣の領域と運動の領域でわずかな違いはあったものの、こうした結果から、保育者は保育場面における不器用さに関連する行動を「気になる」子どもの特徴として捉えており、保育場面における子ども不器用さが保育者の「気になる」要因の一つとなっていることを示唆している。

(2) 「気になる」子どもの手の不器用さと保育者の印象

「気になる」子どもの不器用さは、基本的な生活習慣、作業、運動の3領域に分類できた。基本的な生活習慣の領

域では「着替えなどに時間がかかる」「コップの水などをよくこぼす」、作業の領域では「作品を作る時間がかかる」「はさみをうまく使えない」、運動の領域では「ボールのつきがうまくできない」「リズムうちが苦手である」が高い割合を示したことから、すべての領域において手先の動作に関わる不器用さが関連していることが示唆された。手先の動作の不器用さは、先行研究においても不器用さの核となる現象として指摘されている(Jongmans, Smits-Engelsman & Schoemaker, 2003)。渋谷(2010)は、手先の動作が不器用さの重要な指標であるとし、適切な支援法の構築のためこの領域に焦点を当てていくことの重要性を指摘している。特に製作などの作業場面や集団でおこなう運動場面では、手先の不器用さが理由で周囲のペースとズレが生じ、集団から逸脱した行動に見える場合があると考えられる。このことから子どもの不器用さ、特に手の動作の不器用さを把握した上で、保育場面における配慮や個別支援が必要であるといえる。

(3) 「気になる」子どもの不器用さと二次的な問題

本研究の結果から「気になる」子どもの不器用さの特徴として、(2)で述べた手の動作に関わる不器用さの特徴と、「着替えなどに時間がかかる」「作品を作るのに時間がかかる」といった保育場面の集団活動の中で他の子どもたちとの比較の中で顕在化する不器用さの2つの特徴がみえてきた。前者の特徴は、「気になる」子どもが課題に取り組む時間を延長させる可能性が高く、さらに「気になる」子どもが集中力を持続できない状況になると推測できる。後者の特徴は、集団活動からの遅れや逸脱だけにとどまらず、課題への意欲の低下や自己肯定感

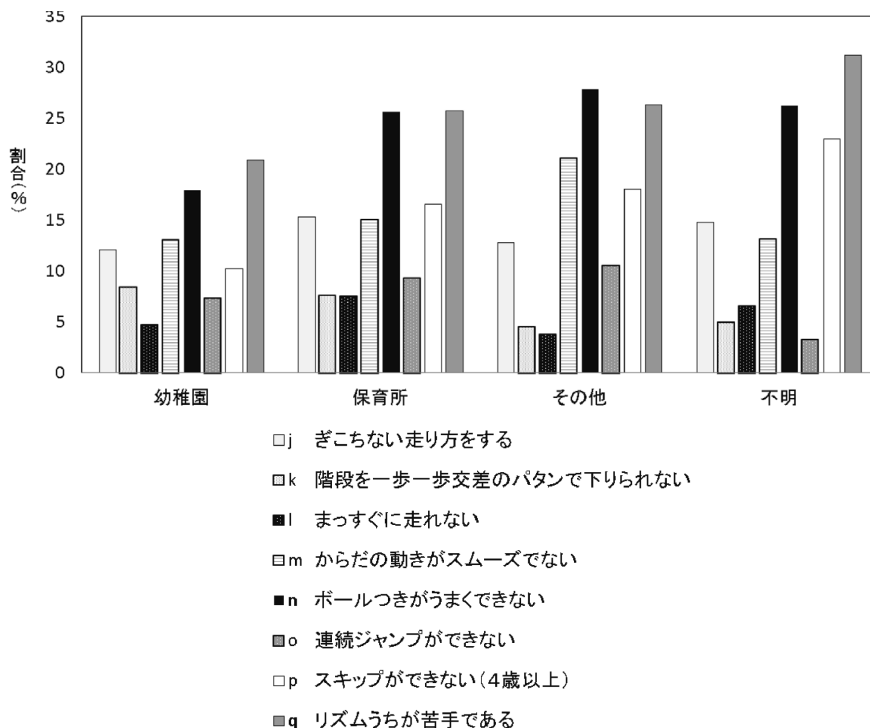


図3 運動領域の不器用さに関連する行動の割合(園種別)

の低下につながると考えられる。このように不器用さを示す子どもが、低い自己肯定感や高い不安感、あるいは対人的困難など心理社会的問題がみられることが知られている (Cantell, Smyth & Ahonen, 1994; Schoemaker & Kalverboer, 1994)。このことは「気になる」子どもの不器用さという特徴が原因ではなく、その対応から生まれてくる二次的な問題である。「気になる」子どもの不器用さをできるだけ早く把握し、保育場面における適切な声かけや具体的なサポートが必要だといえる。また、課題に対する期待水準や自己肯定感を高めるための支援のあり方を検討と同時に、そもそも二次的な問題が生じないような予防的支援の充実が望まれる。保育場面だけでなく保護者との連携により家庭における支援についても検討する必要がある。

5. 今後の課題

「気になる」子どもの不器用さを検討するためには、本研究のような保育者を対象とした調査研究では、保育者の「気になる」子どもの捉え方や保育観あるいは経験などが影響すると考えられる。不器用さを示す子どもの真のニーズを明らかにするためには、実験や観察による実証的な研究、あるいは事例研究によるアプローチが重要だといえる。また、本研究で取り上げた身体的不器用さだけでなく、コミュニケーション上の問題などにおける社会的不器用さにも焦点をあて、多角的なアプローチにより「気になる」子どもの理解と支援のあり方についてさらに検討する必要がある。

〈付記〉

岐阜県下において、質問紙調査に協力して下さった幼稚園・保育園の先生方に深く感謝いたします。

〈引用文献〉

池田友美・郷間英世・川崎友絵・山崎千裕・武藤葉子・尾川端季・永井利三郎・中尾禮子 (2007) 保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究.小児保健研究, 66(6), 815-820
大神優子 (2011) 「気になる子」に対する保育者と保護者の評価—SDQ(Strengths and Difficulties Questionnaire)を利用して.和洋女子大学紀要51, 179-

188

- Jongmans, M. J., Smits-Engelsman, B. C. M., & Schoemaker, M. M. (2003) Consequences of concomitant learning disabilities for severity and type of perceptual motor problems in children with developmental coordination disorder. *Journal of Learning Disabilities*, 36, 528-537.
- 郷間英世 (2007) 軽度発達障害によく見られる症状、どのような症状があるときに軽度発達障害を疑うのですか？また症状が明らかでも家族に病識がない場合どのような対応が適切ですか？. *小児内科*39(2), 165-167
- 渋谷郁子 (2008) 幼児における協調運動の遂行度と保育者からみた行動的問題との関連. *特殊教育学研究*, 46, 1-9.
- 渋谷郁子 (2010) 幼児の不器用さについての保育者の印象—M-ABCとの関連から—. *立命館人間科学研究*, 21, 67-74.
- 無藤隆ら(2005) 「気になる子」の保育と就学支援, 東洋館出版社
- 別府悦子・西垣吉之・水野友有・林陽子・眞野美佐子・喜多一憲・山田陽子・浅野俊和・山田丈美・平井博史・柴崎直人・加納誠司・平野華織・宮本正一 (2011) 幼稚園・保育所(園)における「気になる」子ども・保護者への対応の実態と保育者養成—園長・主任調査をもとに— (第1報). *中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要*, 12, 119-128
- 本郷一夫・高橋千枝ほか (2004) 「気になる」子どもの保護者支援に関する調査研究. *教育ネットワーク研究室年報*4, 1-15
- 本郷一夫(2006) 保育の場における「気になる」子どもの理解と対応 プレーン出版
- Henderson, S. E. & Hall, D. (1982) Concomitants of clumsiness in young schoolchildren. *Developmental Medicine and Child Neurology*, 24, 448-460.
- Schoemaker M. M., and Kalverboer, A. F. (1994) Social and affective problems of children who are clumsy: How early do they begin. *Adapted Physical Activity Quarterly*, 11, 130-140.